

オジロトウネン *Calidris temminckii* (Leiser)

【選定理由】

春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の水田や蓮田、休耕田など平野部の淡水湿地に渡来し、一部は越冬するが数は少ない。沿岸部に多数存在した淡水湿地の埋め立てや、水田の転作による乾燥化により淡水湿地環境が消滅し、淡水湿地である水田から餌となる生物が消失したことで、生息可能な環境が喪失している。

【形態】

全長 13～15cm。夏羽は、頭から胸および上面全体が黄褐色または赤褐色で、黒色の斑がある。冬羽は、頭から胸および上面が一様な灰褐色。幼羽は、冬羽に似るが上面の肩羽や雨覆に羽縁がある。嘴は、トウネンに比べて細めで、脚は黄色味がある。



愛知県西尾市, 1990年10月26日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

ユーラシア大陸北部沿岸で繁殖し、アフリカ東部、インド、東南アジアなどで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、本州中部以西では冬期も生息する。

県内では、主に春と秋の渡り時期に、伊勢湾、三河湾沿岸はじめ平野部の淡水湿地に生息し一部は越冬する。

【生息地の環境 / 生態的特性】

水田や休耕田、埋立地の水たまり、河川敷などに単独から数羽で生息し、水中や地上の小動物を捕食する。干潟など海岸域に出ることはほとんどない。

【現在の生息状況 / 減少の要因】

県内の主な生息地として、愛西市(旧立田村)、鍋田周辺、一色町、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺があげられる。元来数が少ないが、近年は記録頻度が減少した。特に、冬期は水田が乾燥するため、越冬に適した淡水湿地はごく限られる。

【保全上の留意点】

国内でも愛知県はこの種の代表的な生息地といえる程確認数が多く、越冬例も多かった。越冬可能な条件は冬期も凍結しない水路等の存在と、餌となる生物が多く生息していることである。水田に本来の生態系を回復するための努力が必要である。

【関連文献】

桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥, pp.202. 文一総合出版, 東京.
真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.122. 世界文化社, 東京.